

看板レゾナンス

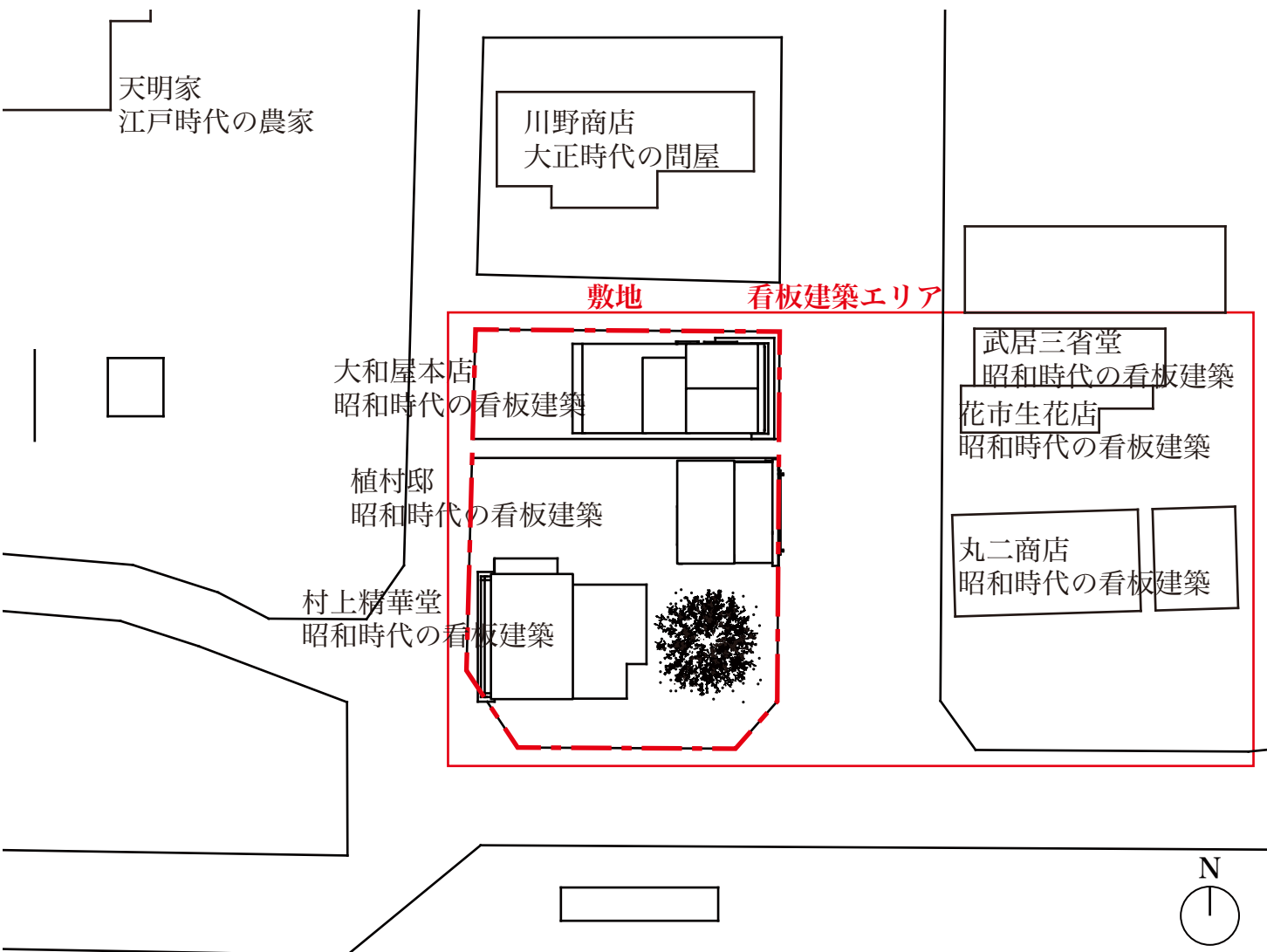
—断絶した3棟を結び、周囲と響き合う看板建築の再生—



01 敷地・対象建物

課題は、東京都小金井市の江戸東京たてもの園に展示されている建物の中から任意の建物を選び、環境シュミレーションを活用したリノベーションを行うというものである。

私が着目した、江戸東京たてもの園の面白さ・特徴は、異なる場所で建てられた建築が全く脈絡のない土地に一堂に集められ、周辺環境と断絶している点にある。敷地を選ぶにあたり、この特徴が意匠面や環境面など様々な側面で良くも悪くも顕著に現れていると思われる、看板建築エリアの西側を選定した。敷地内には北から順に、大和屋本店、小道を挟んで植村邸、村上精華堂が並んでいる。



大和屋本店

建築年代：1928年（昭和3）
旧所在地：港区白金台四丁目
乾物屋（鯉節・昆布など）



植村邸

建築年代：1927年（昭和2）
旧所在地：中央区新富二丁目
貴金属類や時計を訪問販売していた



村上精華堂

建築年代：1928年（昭和3）
旧所在地：台東区池之端二丁目
化粧品屋



02 分析

■孤立した佇まい

元の環境と切り離されていても、再配置の仕方によって看板建築エリアの東西では趣が異なる。東側では武居三省堂と花市生花店が隙間なく並び、角地にあった丸二商店が道を彩ることで、寄せ集めでありながら昔から群をなしていたかのような佇まいを見せている。対して敷地である西側は、看板建築同士が絶妙な距離を持って再配置され、隠れていた側面のファサードが剥き出しになり、建物と無関係な外構が広がることで、孤立した佇まいとなっている。



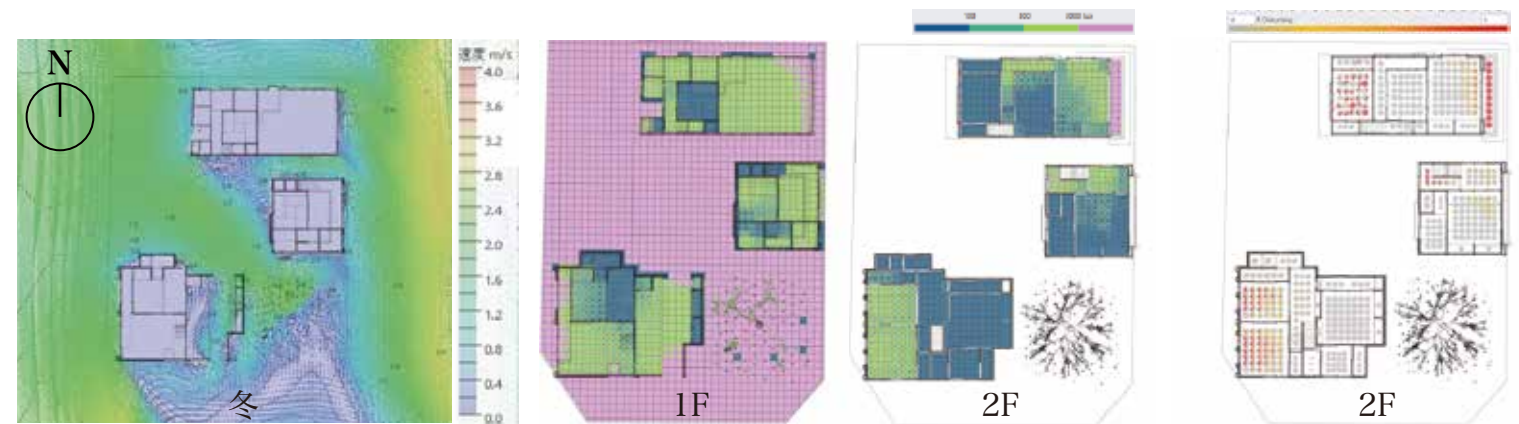
■1階のみで完結した内部空間体験

現在見学できるのは1階のみで、2・3階の内部空間は体験できない。各地から移築されたにもかかわらず、その集合性が十分に活かされず、看板建築が孤立した部分的な展示にとどまっている。2・3階を閉鎖している理由は、耐震性能が不十分であるためと学芸員の方から伺った。また、外観では看板の存在感が際立つ一方、内部に入ると天井に遮られて看板を感じられず、その点に勿体無さを感じた。



■ギャップのある内外の環境

風解析では冬は北風が中庭に侵入することがわかった。UDI解析では屋外は人間が快適に過ごすには照度が高すぎることと、2階では後付けされた戸によって、照度が十分でなく、屋外と室内で極端な差があることがわかった。グレア解析では窓際に不快なグレアが発生していることがわかった。



03 提案

■3棟をつなぐ建築の挿入

過去の写真に見られるような群としての佇まいを参照し、3棟をつなぐことで一体的に見える空間を計画した。環境解析を用いた、建築内部を越えて広がる光や風のデザインにより、室内だけでなく屋外も滞在しやすい環境にすることで、3棟相互や周辺環境との新たな関係性を生み出すことを考えた。また、新築部分が耐震補強を兼ねることで、閉鎖されていた2・3階へのアクセスも可能にすることを考えた。

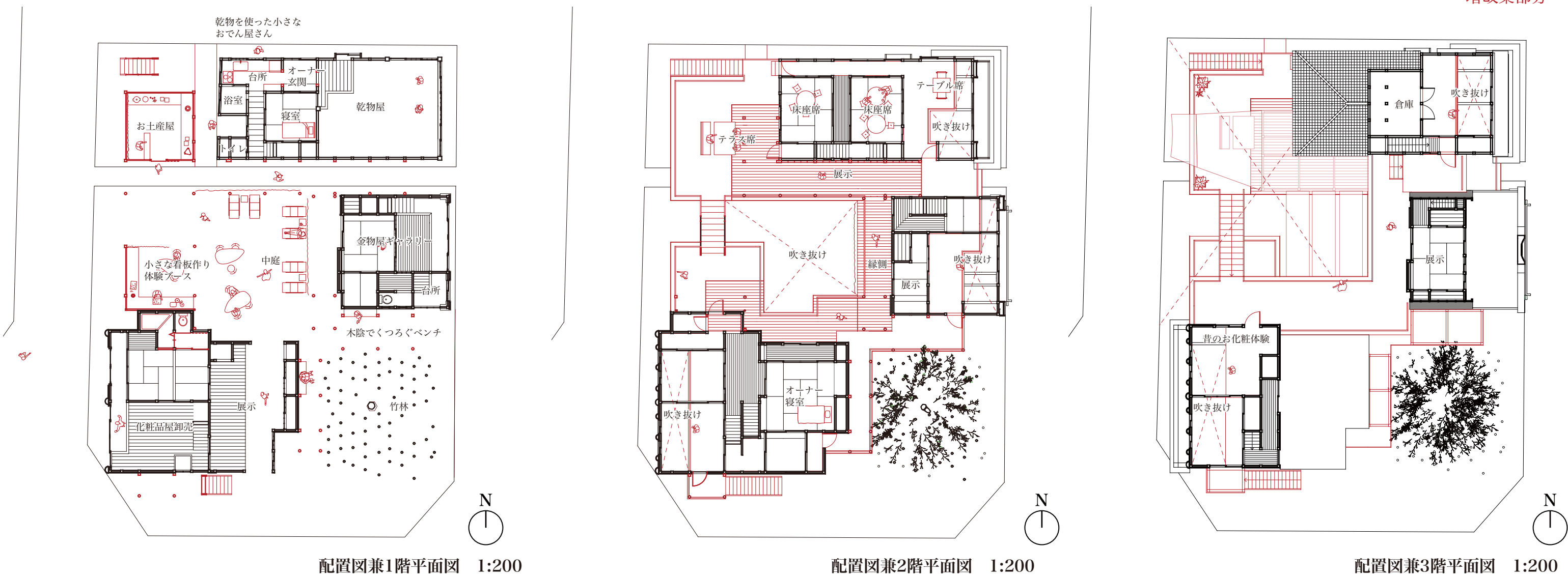
過去写真（から引用）

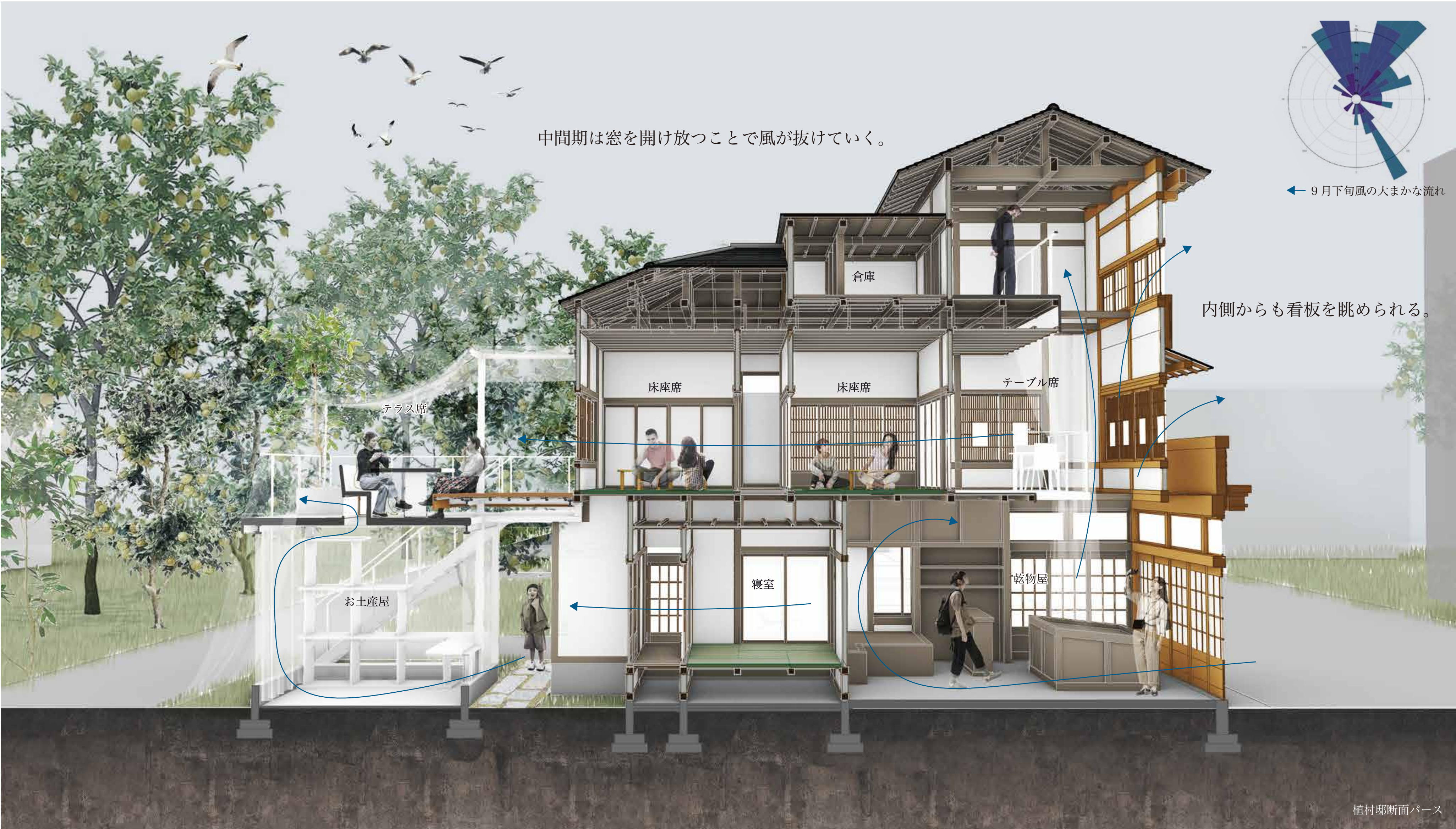


看板建築が単体で存在しているよりも、群をなして一体となっているように見える。

■設計

既存用途を引き継ぎつつ、おでん屋さんや看板作り体験ブース、展示スペースなどを追加している。





05 環境解析結果比較

